

林氏は一般彫刻史上から、小野氏は儀軌を主とする立場から、明珍氏は實査的な立場からの所言であつて何れも耳を傾けしむるものがあり、相俟つて東寺の諸彫刻の全般的意義を明かならしむるものである。

本書に東寺の繪畫に關する論説を載せなかつたのは、事情は知らず、恐らく編纂者自身の遺憾としてゐる所であらうと思ふ。更に望むならば工藝について、また今次の名寶展覽會を機として始めて公開せられたる諸文書について知るところありたい。唯本書の編纂の目的は之等凡てについての用意ある論叢であるよりも、差當つての機會に對するよき手引を作るにあつたのであらう。その意味に於ては十分にその役目を果し得てゐる。(渡邊)

菊判假綴 口繪網目版五十七圖 本文一二八頁 昭和九年四月一日洛東社發行 頒價二圓

文人畫の發生 (東方學報 京都第四冊)

伊勢專一郎

氏は文人畫の發生を論するに當り、舊來の一般的な考へ方に依り、先づ支那山水畫史の概要を系統的に考へる。即ち五代荆浩に至つて白描山水は大成するといひ、荆浩以後の山水畫に南北二宗の對立が生ずるといふ。宋元時代に至つて北畫が次第に類型化の弊に陥つてゆく時に當り、南畫はそれを畫く者が自然に於ける自己の感懷を中心對象としてゆく爲漸次發展に向ひ、元期になつて四大家等を得て全く破格的なり、以後甚だ流行するが、この種の南畫を明代以後文人畫と呼ぶ。

文人畫の典型的なるものは元季四大家の畫であり、四大家は直接南畫から出るものと考へられるから、文人畫は南畫より出づるものともいへる。此の發生の遠き起原を考ふると明の董其昌の言ふ如く唐の王維に存するとも言つてよい。この點に限つて董其昌の説に賛同してゐる。

氏は文人畫の概念を規定する爲にその特殊性を考へ、その畫は氣韻高きこと及び、素人的なるを要すとし、此の二の特色を擧げてこれを詳細に論じ、これ

に依つて文人畫の南畫より出ざるを得なかつた經路を述べてゐる。

此の論文に存する特色は以上の議論よりも寧ろ董其昌の南北二宗の議論及び文人畫論の再吟味とそれらの訂正に存する。即ち董氏が荆浩以前に南北二宗の對立を考ふるは史實に非ずとし、又文人畫の起原を王維と考ふるのはいが、王維以後の文人畫に董源巨然と共に李成范寬を加へてゐるのは議論の粗雑を來してゐるとして董氏のこの二つの議論を訂正してゐる。

さて本論文を文人畫の特に發生論として見る時は、多少董其昌を中心とする文人畫の概念整理と思はるゝ點に觸るる事多く、元明に於ける文人畫の發生其自體の窮明に力を用ひらるることが尠い様に思はれて、讀者をして問題の性質の把握に困難ならしめてゐる感がある。かかる望蜀の嘆は姑らく措いて本論文の所説は更に氏の支那山水畫史の一研究として聽くべきものが多いであらう。

(西村)

美術研究所時報

美術懇話會五月例會は十二日美術研究所に於て開催、主として西洋近代繪畫素描、彫刻約六十點を諸家より借用して展觀し、兒島喜久雄氏の陳列品に就ての講話を聽いた。尙翌十三日この展觀を公開した。

寄贈新刊圖書

- | | |
|-----------------------------|-------------|
| 秦漢瓦磚集錄 中村不折著 | 著者 |
| 自顧愷之至荆浩 支那山水畫史及附圖 伊勢專一郎著 | 東方文化學院京都研究所 |
| 遼金時代ノ建築ト其佛像 關野貞編 圖版上冊 竹島卓一編 | 東方文化學院東京研究所 |
| 帝室博物館圖錄 四ノ二 | 帝室博物館 |
| 小出楢重素畫集 橋本基編 | 編輯者 |
| 唐宋元明 人名辭書續篇 訂正 增補 中山梨軒著 | 著者 |
| 清書畫家 | |